

③ 児童の変容調査からみた研究成果の分析

本校では、国語科における表現力の向上を目指して研究実践を重ねてきた。児童一人一人の向上的変容がみられれば、研修に対する教師の関心・意欲は高まるであろうと考え、変容調査を行い、以下の結果を得た。

表現力に関する変容調査 (対象～本校全児童317名)

項目	前3年12月	前4年12月	調査方法
話し声の大きさ (点)	1.5	1.7	※「昨日のこと」を教師の前で1分間
話す語尾 (点)	1.5	1.7	自由に話す。○～2点、△～1点、
力文の構成 (点)	1.3	1.4	×～1点とした平均点で表した。
話す意欲 (%)	68.4	73.5	※「か」のつく言葉は?と質問、
音ひろい読み (%)	26.1	14.6	すぐに挙手できた人数の割合。
読まどし読み (回)	0.5	0.4	※学年に応じた初出文章で調査。
想像読み (回)	0.9	0.8	回数は、一人あたりの平均回数で、
1月漢字間違え (回)	1.4	0.9	所用時間は、一人あたりのかかった
読解所要時間 (秒)	35.8	34.0	平均時間で表した。
作文力 (文字数)	90.5	95.6	※学年に応じて簡単な課題を与え、1
			分間で書いた平均文字数で表した。

④ 校内研修に対する教師の意識調査

※対象～本校学級担任及び担任外教諭16名、  
※調査時期～9月調査 -----、12月調査 -----

項目	評価				
	+2	+1	0	-1	-2
* 主題設定は合理的な手続きにより職員全体でなされたか。					
* 主題は全職員に共通理解され、解決の意欲を持っているか。					
* 仮説は全職員に十分理解され、実践に生かされるまでになっているか。					
* 研究組織は、各人の能力が十分生かされる仕組みになっているか。					
* 仮説検証のための研究方法が適切であり、全員に理解されているか。					
* 検証のための予備的調査がきちんと行われたか。	12	9			
* 研究遂行のための記録方法や用具が整えられ、精確に記録できたか。	月	月			
* 仮説と成果を常に比較しながら、検証を正しく行っているか。					
* 事後研究会は、仮説検証の場となっているか。					
* 事後研究会の進め方では、一人一人の意見や考えが出されるように工夫されているか。					
* 子どもがどんな条件で、どう変容したかを明確につかんだか。					
* 研究によって教師の資質は向上したか。					

両調査の間には、国語科学習指導についての研究公开发表があった。教師集団が熱心に取り組んでくれた結果もあり、どの項目も評価が高まってきた。

(2) 研究の考察

- 仮説検証授業の手法についての研修の機会を持ち、そのねらいと性格を明らかにしていった結果、仮説の重要性を共通認識し、テーマに迫るための手立てを試行錯誤しながら講じていくようになった。
- 事後研究会で、手立ての有効性を協議の柱に据えていった結果、話し合いの内容が焦点化され、深まりがみられるようになった。
- 児童の変容調査の結果、研究の成果が表れたことは、教師一人一人に確かな手応えをもたらし、大きな励みとなっていた。
- 校内研修に対する義務意識を転換すべく手立てを講じてきた。今では研修主任として提起する前に、あれこれと提案・指摘してくれる声、寸暇を借しんでブロック会や部会を開いて熱心に討議する姿が目立つようになってきた。国語科研究公開においては、教職員一人一人が、それぞれの持ち場で、自身の持ち味・持てる力を存分に発揮し、充足感を得ることができた。

6. 今後の課題

- (1) 研究公开发表という目標がなくても関心・意欲を継続して高めていきたい。
- (2) 全体と学年ブロックのテーマは、間を置かずに設定するとさらに充実する。

(参考文献省略)